

年頭所感

家村克行

1976年の新春を迎え一言ご挨拶申し上げます。浦幌町の社会教育施設の一つである浦幌町郷土博物館長に昨年7月1日に就任してから早くも6ヶ月の月日が流れた次第ですが、未だ博物館園活動の社会的役割すら把握しきれずいるところであります。

もとより博物館園活動は、資料の収集・保存・展示・調査・研究の5本の柱を機軸とし社会における生涯教育の中心的主柱として機能するのが本筋であると考えます。1951年に博物館園関係者の熱意と努力により「博物館法」の成立を見、社会教育の中における博物館園の役割と位置付けが明確となり、その後の館園活動に活力を与えて来たわけであります。しかし、ひとたび実施段階へ入ってみると、予算不足と人的不足により本来の業務が全うされないままに月日を費みせざるを得ないというのが実態であり、特に本館にあっては専任職員や学芸員の未配置により、博物館の機能を十二分に發揮することができず、考古・開拓記念物をはじめとする貴重な学術資料は死蔵化し、陽の目を見ることなく収蔵庫の奥に保管されているのが実情であります。

こうした傾向は、特に「北海道百年」を起点と

して設置された市町村の郷土館・郷土資料室等にこれらのことが多く見られていると思います。浦幌町郷土博物館もこれらの館園と同じく1969年に開館したばかりの若い館園で、これらの館園と同じような実情にあります。

しかしながら、幸いにも本館では1972年より館活動の一環として『浦幌町郷土博物館報告』の出版を続け、本号で第7号になるわけでありますがその間、関係各位より数々の暖いご教示・ご助言を賜わりその都度編集に生かしている次第ですが今後とも館報を続け、少しでも館資料並びに十勝地域を主体とした広い分野の短報・論文等の収録を企図していきたいと考えております。

博物館の扱う分野は、歴史・芸術・民族・民俗・産業・考古・自然科学・開拓記念物等多岐に亘りその専門性は増え深まり、単なる事務職員のみでは処理しきれない状態となり来館する研究者などに多大なご不便・ご迷惑をおかけしております。

1976年はこれらのことに対する配慮し、住民各位並びに関係者各位の希望に十分副えるよう尽力する所存でありますので、今後とも変わらないご支援・ご協力を願い申し上げて年頭所感といたします。

(浦幌町郷土博物館長)

浦幌町郷土博物館所蔵の阿部宏氏の蝶標本

円子紳一

前回の報告のときに、浦幌町郷土博物館に保存されている阿部宏氏の蝶標本について紹介したいと記したが、昨年秋友人の結婚式で偶然先生にお会いでき、その旨をお話ししたところ、快く承諾して下さいましたので、ここに報告することとした。

阿部先生の寄贈された標本は、1963年から1966年の4年間に採集されたもので、アゲハチョウ科

6種、シロチョウ科6種、ジャノメチョウ科6種セセリチョウ科5種、タテハチョウ科22種、シジミチョウ科17種の計62種から成っている。

これら62種の中で最も特筆すべきことは、1964年7月20日(常豊)のヒョウモンチョウの採集であろう。本種は、北海道・本州に分布するが、北海道では大沼付近、帯広付近などの温暖地にしか産地が知られていない。また、浦幌町郷土博物館